

第 23 回「京都御苑ずきの御近所さん」

護王神社 宮司 文室 隆紀 様



■護王神社の拝殿前に、狛犬ではなく雌雄一對の狛イノシシが出迎えてくれます。その訳を教えてくださいませんか？

護王神社の御由緒の話になりますが、奈良時代、女帝・称徳天皇の時代に弓削道鏡^{ゆげのどうきょう}という僧がいました。道鏡は、天皇に近い立場を利用し、八幡の神の教えと称して「道鏡をして皇位に即かしたまはば、天下太平ならん」という御神託があったと天皇に嘘をつき、その座を狙いました。称徳天皇は、一般の臣民が天皇になったことはなく、どうしようかと悩んでしまいます。そこで、官僚であった和氣清麻呂公^{わけのきよまろこう}を呼び、神託の真偽を確かめるため、九州の宇佐八幡へ派遣させました。清麻呂公が宇佐八幡で受けた御神託は、「我が国は開闢以来、君臣の分定まれり。臣を以って君と為すこと未だあらざるなり。天津日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の者は速やかに除くべし」というものでした。要するに、天皇の位には天皇の血統の人を立てなければならないということで、それを称徳天皇に報告しました。

和氣清麻呂公に天皇の位を阻止された道鏡は怒り、清麻呂公には別部穰麻呂^{わけべのきたなまろ}、姉の和氣広虫姫^{ひろむし}には別部狭虫^{さむし}という別名を与えて、大隅国へ島流しにしています。それでも満足せず、大隅国へ向かう途中で攻撃をしかけるのですが、そこにイノシシが現れ、清麻呂公を助けたという話なんです。また、清麻呂公は「万世一系の皇統がここにできた」と島流しの道中で再び宇佐八幡へお参りに寄るのですが、榑田村^{しもとだむら}というところに差し掛かったときに、300頭のイノシシが現れて、清麻呂公をエスコートして宇佐八幡まで随行していったという話もあります。本当は、秦氏が守ったんじゃないかなとは思いますが、これらの話からイノシシが守り神になった訳です。それで神社の拝殿前に「狛イノシシ」があるんですね。

それと、道鏡は清麻呂公を島流しにする際、よぼろの筋という、脚のちょうど膝の裏ぐらいの筋を切ってしまうんです。それで、行きは輿に乗っていったのですが、宇佐八幡へお参りしたときには、不思議と足も腰も快復し立って歩けるようになっていて、それで流刑の地へ行かれたという経緯から、護王神社は足腰の神さんだといわれる訳です。

現在の護王神社は、明治 19 年に高雄山の神護寺から護王神社に御遷座されました。この時、普通は神社の境内には狛犬を建てますが、清麻呂公をお護りしたイノシシの像が建てられたのです。

■護王神社の宮司のお仕事は御苦労が多いと思いますが、印象に残っている出来事はございますか？

私は松尾大社に長年勤めておりましたが、37年間目の時に「護王神社を復興してください」という依頼があって、平成 9 年にこちらに来ました。当時の護王神社はそりゃあ酷いもので、境内は荒れ果てて、真っ暗というか、すごく暗いイメージでした。その反面、「奥ゆかしく、とても

神秘的なお宮ですね」と言われることもありましたが、ここは、隣の御所が神域を守っておられますので。護王神社を明るくして、たくさんの方が来てもらえるような、お参りしやすいお宮にしないといけないというのが、私が来たときからの目標です。

当時は、御所の一般公開があつたりしても、護王神社には多くの方に立ち寄ってもらえませんでした。御所に来られた方に、もっと護王神社のことを御理解してもらえたらいいなと思って、平成10年に清麻呂公千二百年祭の記念事業として、烏丸通沿いの玉垣に御神徳絵巻を作って展示したんですよ。北から南へ読みながら入口まで来ると、護王神社の由緒が分かるようになっていきます。戦前の講談社から出版された、子ども向けの絵本ですから、分かりやすいです。それと、烏丸通に面した神社の中ではあまり目立ちませんでしたので、表の烏丸通り沿いに新たな狛イノシシを設置したんです。平成19年が亥年でしたので、平成18年ぐらいのことだったと思います。そうして、だんだんとみなさんにイノシシの神様だと知れ渡るようになりました。

境内に、すごくたくさんのイノシシグッズがあるでしょう。亥年の生まれの方がコレクションとして集めて、護王神社に奉納されたものがいっぱいあるんです。一番はじめは、浦山さんという写真屋さんが1ケース下さりました。それが走りなんです。それから石田さんという方が、父親が集めていたというものを奉納されました。中には百点も持ってこられた方もいらっしゃいました。大切な奉納品が盗まれてしまうと困るので、鍵付きのケースの中に保管しています。中には、「宮司さん、これは間違いなく谷文晁の掛け軸です」と言ってくださった方もいます。谷文晁なんかだとある程度は分かりますが、陶器やらだと分からなくなってしまうので、箱にも管理番号をつけて蔵に保管しています。ものすごく嵩張って困るのですが、箱と物が揃ってこそです。今では、全部で1万点以上になります。細かいお守りなどもあるので、もう数えきれません。有難いことですね。

「経営」と言うと聞こえが良くないかもしれませんが、神社を維持していくことは本当に大変です。平成9年当時はお参りが少なくて、お賽銭が一日千円もありませんでした。

私の考えですけれど、神社もやはり何か特色がないと難しいと思います。一番初めに護王神社に来たときは「皇統護持の神さんですよ」と言っていたのですが、そのままでは本当に維持が出来ませんでした。それで、民間信仰を広めていこうと思ひまして、足腰の神さまのいわれがあり、お守りも40数年ぐらい前からありましたので、足腰のご利益を、と考えたんです。以前は「お守りに足腰を付けるなんてまかりならん」と言われたこともありましたが、やっぱり現世利益ですし、自分の足腰があつてこそ元気でいられる訳ですから。それに、亥年は12年に一度ですが、足腰については毎日のことです。365日、足腰が悪くなった、腰が痛いという方はたくさんいらっしゃいますので、そっちのほうで崇敬的にたくさん来てもらえるんじゃないかな、と考えました。それで、平成18年から19年ぐらいにかけて広め始めたんです。清麻呂公の御命日である毎月21日には足腰祭を行い、怪我をなさった方や足腰の悪い方には無料で御本殿にお参り頂いています。

初めて足腰祭をしたときには、お参りされる方は20、30人ほどでしたが、今では毎月130人ほど来て頂いています。遠方から、新幹線でわざわざお参りに来られた方もいらっしゃいました。それだけ一生懸命な方がおいでになるんだと、とても有難いと思いました。

他にも、北側には喜びに多いと書く「喜多門」を作ったり、なんとか結婚式も増えるように、人力車を飛騨の高山から一台購入しまして、人力車挙式をPRしたりしました。今では「人力車といえば護王神社」と言ってもらえるようになりました。私は、ここ一年くらい、病気がちで調子が悪くてできていないのですが、当時は結婚式もすべて私がやっておりました。「宮司さんにやってもらえて良かった」と言ってもらえたこともありました。

そうして多くの方に来て頂き、崇敬者も北海道から九州・沖縄までいらっしゃいまして、おかげさまで護王神社を維持していけるようになりました。今回、平成の御修造をさせて頂いています。30年ほど前に御本殿のお屋根替えをしていますが、桧皮屋根の耐久年数も過ぎるということで、平成29年2月10日に仮遷宮執行し、11月19日に本殿の御遷宮をさせて頂きます。現在は下地を銅板葺きにしている最中ですが、やっぱり護王神社としては規模が大きい事業です。8,500万円ほどの浄財を集める必要がありますので、ちょっと苦慮しておりますが、皇室を大事にしてお

られる方や亥年生まれの方、今の奉賛会の会長（茶道裏千家前御家元 千玄室氏）も大正12年生まれの方で、昭和10年、昭和22年生まれの方に支えて頂いています。また、段々と若い亥年生まれの人にも護王神社を支えて頂けるようになってきました。その他に、足腰が悪い人にも来て頂いて、崇敬を頂いています。護王神社も盛り上がってきたところですから、何とか私がいる間に清閑な神域にしていく必要があると思っています。

■文室様は切手やポストカードなどの蒐集家でもいらっしゃるのでしょうか、お気に入りのものはございますか？

切手集めは昔からの趣味です。神社関係のものをずっと集めておりました、お参りをする度に買っていました。松尾大社や日光東照宮などたくさんあります。

護王神社に来たときに、何とかして皆さんに護王神社に親しんでもらえるようにと、まず第一に記念切手を作ったんです。つまり、自分の趣味から入ったんです。それで、その年の亥年生まれの人や七五三等で参拝にいらした方に、この記念切手のシートを差し上げました。

テレホンカードも集めています。護王神社のテレホンカードも作りました。交通公社とコラボしたり。もう無くなってしまいましたが、鉄道のプリペイドカードも作りました。

それから、お金もです。和気清麻呂公が描かれた紙幣があるんです。左肖像画だったり、裏にイノシシが描かれていたり、デザインは色々あります。個人の趣味として集めているものですね。

切手集めの趣味を新聞でとりあげてもらって、みなさんにお見せしつつ護王神社の紹介をしたこともあります。こんな風に何かきっかけをつくって、自分の趣味を通じて、いろんな方に護王神社のことを知ってもらえればいいな、と思っています。

■文室様の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

御所にはお世話になっています。4月4日の護王大祭（例祭）と11月1日の亥子祭が関連行事ですが、亥子祭では亥子餅を搗いて、御所へ奉納に行きます。形式上、失礼ながら私が天皇の役でして、5人の女房を引き連れ、亥子餅を御所へ献上に行く訳です。例祭では蛤御門を通過して紫宸殿の前に行き、宇佐神託奏上をするんです。「我が国は開闢以来、君臣の分定まれり。臣を以て君と為すこと未だあらざるなり。天津日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の者は速やかに掃除すべし」という言葉を言って、みんなが二礼二拍手一拝で、紫宸殿に向かってお参りをし、帰る訳です。京都御所、京都御苑とはこうしたつながりがありますから、当たり前ですが大事にしないとイケないと思っています。

他に、京都御苑の駐車場も頻繁に借りています。最近、朱印にたくさん来てもらえます。2、3日で250人くらい来られることもありますし、バスも毎日のように来てもらえます。そのバスの駐車のため、御苑の駐車場をお貸し頂いています。駐車場が蛤御門の近くにあるから、護王神社にも来てもらっています。お祭りなどで境内に駐車していただけないときには、御苑に駐めてくださいと言って、お参りしてもらっています。境内の駐車場は無料ですが、やはり御苑に駐めてもらおうと安心ですからね。まあ30分、1時間ぐらいのことですから、御苑もある程度は潤ってもらえるのかなと思っています。神社に来て頂ければそれだけまた崇敬者が増える訳ですから、お互いさんだと思います。近くに京都御苑があるので、有難いです。

お互いに、護王神社も繁盛して、御苑にもたくさんの方に来て頂けたらいいですね。御苑の見るところはたくさんあるんですから。拾翠亭や名庭もありますし、最近では仙洞御所も見学することができる訳ですね。私も何回か行かせてもらっているんですけど、昔は手袋と靴下をはいて入らせてもらっていました。中を観覧すれば、いいものがたくさんありますね。私は「お

金を頂いたらいいやんか」とよく言ったんですけどね。今、迎賓館は有料ですよ。やっぱりお金を頂かないといけないと思います。あれだけの施設を維持していこうと思ったら大変ですから。例えば、聚楽の間でもちょっと壁を修理しようとしたら、やはり維持管理費が必要です。護王神社でも玉垣を修理しようと思えば見積りをして貰ったら、とても高く、悩んでいるところです。

こんな言い方をしたら良くないのかもしれませんが、他の社寺でも上手に宣伝をして、大流行になっていたりしますからね。松尾大社さんでは、今の時期はヤマブキが咲きますが、他の時期は人が来ないからといって、昭和48年頃、重森三玲さんに上古の庭、曲水の庭、蓬萊の庭というものをつくってもらった訳です。「昭和には昭和の庭があってもいい」ということで。今では、そのお庭があるから維持ができています。こういうふうに、先を見越して一つのものを作らないといけないんだと思います。

神社も一緒だと思います。何か一つのものをつくって、今の時代では「あの時代にああいうものをつくった人がいたから、それで今があるんやな」と思ってもらえるように、貢献できたいんじゃないかと思います。その一つとして、やっぱりもっと御所との連携といいますか、上手くお互いが繁栄できるように、何かの形で人が来てもらえるようにしたいですね。

それと、とても印象に残っている出来事があります。ちょうど丸太町通と烏丸通が交差する場所に交番がありますね。護王神社に来たばかりの頃、交番から少し行ったところで、私と職員と二人で、白衣・袴姿で、お迎えをした時に、行幸に来られていた天皇陛下が我々をご覧になって、わざわざ車を減速して窓を下げて頂いたんです。もう感激しましたね。ものすごく有難くて、本当に涙がこぼれました。

ちょうど亥子祭で亥子餅を奉納するときに、陛下が大宮御所に泊まっていたことがあるんです。奉納のときに「我が国は開闢以来～」や「亥子の御祝儀滞りなく申し収め候」の言葉を使うんですが、そのときにでもね、声が聞こえて、あのお餅を召し上がっていたとしたら、有難いなあと思ったことがあります。

護王神社がだんだん良くなって、皇室関係の方々にも「あの神社、和氣清麻呂公をお祀りしているし、一度行ってみたい」と思ってもらえるような神社にしたいんです。私どもの方から「来てください」と言うのではなくて、自然と、「あそこに行きたいなあ」というふうに思ってもらえたら、本当に有難いと思っています。皆様にとっても散歩の途中にでも、「ちょっと護王さんに行ってくださいか」と言って頂ける神社にしないといけないと思います。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

私は全部好きです。全部好きというか、春は春、夏は夏、秋は秋ですね。御苑の中は、しょっちゅう通らせてもらっていますが、どの時期も好きですね。春には桃を見させてもらい、桜の花も全部見させてもらっていますが、特に、閑院宮邸の前の百日紅、あの花は大好きです。桜は、三日見ぬ間に散ってしまいますが、百日紅は百日間持ちますからね。

護王神社にも百日来てもらおうと思って、ものすごく綺麗な百日紅を植えたんです。でも、なかなか大きくなりませんし、いい花を咲かせようと思うと難しいですね。「宮司さん、これ、樹の上がつんでいるからとちやいますか。百日紅はもうちょっと日が当たらんとあかんのちやいますか。」というアドバイスを受けながら育てています。それにしても、閑院宮邸の前にある百日紅を見ていると「綺麗やなあ、あれが欲しいなあ」と思いますね。僕が一番好きなのは、百日紅です。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由におっしゃってください。

私から要望があるとすれば、結婚式のために御苑で写真をパッと撮るくらいならいいですよ、として欲しいですね。今は管理事務所の許可が要りますから、人力車で蛤御門の辺りを廻って、自然の流れで「ああ、こんなところもいいなあ」とおおっぴらに写真を撮ることは出来ませんので。ちょっと大目に見てもらえると有難いなあ、というのが私の希望・要望ですね。

あと、外人さんは難しいですね。どこまで言っているのか。11月1日に、亥子餅の儀式で御所清所門の中に入れてもらいますが、入るためには住所や生年月日を登録する必要があります。以前は、登録などは関係なくザッとみんなで入っていたのですが、この頃は規制がありますので出来ません。ところが、外人さんは分からないのでしょうか、一緒についてきてしまうんです。今まででしたら、「まあまあよろしいわ」と入れてもらっていたんですけど、線引きをするというのは、本当になかなか難しいですね。儀式から護王神社に帰ってきましたら、外人さんにも自由にお酒を飲んでもらいますけどね。とは言え、威厳を保たないといけない部分もありますし、あんまり気安く言うのも良くないでしょうし、難しいとこだな、と思っています。

2017年4月25日 インタビュー
聞き手：田村省二、積田真希子

○文室隆紀さま プロフィール○

昭和35年、京都国学院卒業後、松尾大社に37年間奉仕し、平成9年より護王神社の宮司に就任。切手やポストカードなどの篤集家で、自身のコレクションを神社の広報や展示物に活用し、注目を集めている。